



I はじめに

分科会基調は2023年度研究課題をもとに提案された。また討議の柱は分科会「討議課題」をもとに提案された。

II 報告及び質疑討論の概要

—報告1—⑧「ほんまに帰るしな！「ええんねんな！」～Aさんから私が問われたこと～

(滋賀県人教)

—主な質疑と意見—

熊本県 Aさん以外の他の生徒はどのように接してきたのか。なかまがいたのか。

三重県 Cさんの背景をどのように捉えていたのか。

報告者 他の子とのかかわりはあった。自分は関係が悪化していたが他の教員が聞いたり伝えたりするかわりがあった。トラブルがあっても周囲が落ち着かせていた。ただ、毎回誰かがかかわっていたかというところではない。一歩引いてしまうのも事実。私と同じように「程よい距離感」を保っていた。本当にここで分かってほしいという時に分かってくれる人が少なかった。疎外感、悲しさというのが出ていた。

Cさんの背景についてはクラスの中でトラブルがあった。たくさん指導をされた経験がある。だからこそ、他の人に当たってしまう。でも、自分では気づいている。

大阪府 差別者であった自分に気づいたというが、どこに差別があるのかわからない。どういう差別なのか。また、工夫された成果とか生い立ちとか背景を知りたい。

長野県 Aさんとかかわりの中で、当時は教師という立場でしか見ていなかったという記述があるが、教師の立場でのかかわりと一人の人間としてのかかわりとの違いは何か。加えて、「ほんまに帰るしな、ええんねんな」と言われたとき時のことをもう一度後で本人に確認したのか。

報告者 枠にはめて入りきれなかったが生まれてしまった。それが差別につながると思う。この子がいるからというマイナスイメージからスタートしたことが差別ではないか。だから自分は差別者と

という言葉を使った。家庭的な背景はあるが、伝えるのが苦手で粘り強くできない性格も背景に入ると思う。教師の立場と一人の人間としての立場ということの違いは、教師は何かを教える人、しかし、一歩外に出て、学校であろうがなかろうが学校外の姿も見えていくということが人間としてかわるということだと考える。本人にあの時のことを確かめていない。確かめなければならないという気持ちがあったことに今気づいた。

大阪府 人生の長い道のりを力強く踏み出していく力の獲得が教育としては必要だったとあるが、この「力」をどう捉えているのか。

報告者 人に頼るとということ。そのために、自分の信頼できる人を見つけること。そして、自分を知る力、人とつながっていく力も大事な力と考える。

熊本県 Aさんとクラスとのかかわりが見えない。Aさんの思いをクラスに伝える、などの取り組みはあったのか。また、卒業する時にAさんと母親から「ありがとうございました」という言葉があったがその意味をどう考えているのか。

報告者 Aさんについてクラスで話し合ったことはない。「困ってるな」ということはわかるから手を差し伸べていた。一方で感情に振り回されて泣いてしまう子どももいた。Aさんはクラスに対する不満とかマイナスの思いはもっていた。「ありがとう」については、卒業という一つの区切りを迎えることができたことに対しての言葉ととらえている。他の教員から「最後は小杉先生を求めてたよ」という言葉はもらっていた。Aさんとは正面から向き合って話をしていないため、本当のところはわからない。

三重県 進路や学力をつけていくことは大切だけど、仲間づくりはどうつながるのか。周りの子どもたちの見方を変えていくことが大切ではないか。思いやりや優しさでは差別はなくなる。周りの子どもたちがAさんに対する見方に気づけるのか。気づかないから生きづらさを生むのではないか。仲間づくりをどう考えているのか。

報告者 つなげることと、力をつけることをつなげて考えていなかった。周りは変わってはいなかった。私も働きかけをしていなかった。まさにこれが差別だと気づいた。教師は力をつけるものが仕事だと考えたまま実践していた。

三重県 これから6年生の担任をするとしたら、どのようにして周囲の子どもたちの見方を変えるのか。

報告者 例えば行動に対して、結果発表をして、「それはあかんからやめなさい」ではなくて、何でそんな行動をしてしまうのかしっかり向き合って話したい。そして、みんなで共有することを意識する。「この子には何かあるかもしれないよな」という見方ができるように働きかけたい。

三重県 居場所づくりをみなさんがどのようにしているのか教えてほしい。工夫している事例があれば教えてほしい。

報告者 居場所は保健室もしくは校長室が多かつ

た。理由は話を聞いてもらえるから。工夫としてはみんなで子どもを育てようということ。しかし、教室での居場所づくりをおろそかにしていた。教室が心地いい場所になる工夫が必要。

熊本県 差別をなくすということとはつながること。差別をなくすとは取り組みをつなげる取り組み。AさんをつなぐためにAさんのいいところをどのように見ていたのか。

報告者 ダンス、面白い、ツッコミが上手、友達思い、などすてきなところはあった。しかし、課題ばかりに目を向けてしまった。そのために、なかまをつなぐために、いいところをみんなに示したり共有したことはなかった。

大阪府 この子を困らせているものは何なのか。教室の中や学校の中だけでなく、地域の中でこの子を見ていくと見え方が違って来る。また、保護者の生い立ち、生活環境が絡んでいる。保護者は地域の中でどんな立場で今いるのか。そこが見えてくると違うと思う。

報告者 学校は、ルールが多い。こうあらねばならないという期待や空気がある。引っ越してきた詳しい事情はわからない。以前は親戚の方と一緒に住んでいた。小学校に入ったタイミングで母子で暮らしを始めた。小学校の環境は、地域の学校と地域のつながりが強い。地域の方々は協力的で、昔から住んでいる人もいれば、そうでない方々もいる。Aさんの家庭は、途中から入ってきた。母子ともに地域性に馴染めないことがあったかもしれない。

新潟県 クラスの子どもたちと一緒に解決できる課題として捉え直しをしたとして、もっとこういうことをやってあげればよかったと思うことは。

報告者 クラスを集団と捉えていた。集団づくりばかりで個人に視点がなかった。みんながその子について考える時間をつくっていたら、何か変わったと思う。

滋賀県 質問が多い。意見交流の時間に意見を言える人がいない。すごく寂しい。これまで多くのレポートづくりにかかわってきた。報告上の課題は多々ある。しかし、大会自体が差別をなくすためにやっている。差別的なことを共有するためではなくて、なくすために集まっている。つまり前提として差別がある社会を生きているということは、差別がある社会を支えてしまっている私がかここにいる。まずは、そこに立たないと差別をなくす一歩というのは難しい。差別の形だけではなくて、差別がある社会を生きている私の当事者性ということが今大きく問われている。

学校全体でみんなでやると言っておきながら、チームでできていたのか。それでいいのか。小杉さんは追いかけることのできない先生なのか。そうではない。力のある先生だ。小学校6年間で卒業させるということであればいいかもしれない。でもこの先70年80年の長い人生に向けて必要なことは何だったのか。学校の仕事としてということではなくて、その子どもの人生にかかわってしまったも

のとして大事なことは何だったのかと考えたときに、「ほんま帰るしな」これは、必死のSOSだった。その必死のSOSに応えることができたのか、できなかったのか。これは学校の仕事の話ではなくて、この子の将来の人生を考えた時ということ。50M走のアドバイスとマラソンのアドバイスは違う。それが進路保障ということ。私は「小杉さんは逃げた」言った。何で逃げたんだということをもっと共有しようということがこの報告がある。改めて思ったことは、子どもたち同士の距離、先生と子どもの距離は、これでいいのか。このレポートの表現でいうと、程よい距離。そこそこ心配もするし、そこそこ楽しくもするし、でも本当にしんどい時はこの結果。先生が距離をつくれれば子どもたちもそれを見ながら程よい距離でかかわろうとする。私たち自身も日常生活の中で、学校や職場で、地域社会で、程よい距離というところでごまかして、でもそこでごまかしているということ自体が、差別がある社会を支えているということ自分を突きつけられているということだ。だから距離がすごく重要。学校がしんどい場所になっていないか。学校自体が「いい居場所」になっていない。学校の外に「いい居場所」をつくろうとする流れがある。学校の存在意義が問われているのではないのか。

—報告2—⑥ Aが私に教えてくれたこと
(高知県人教)

—主な質疑と意見—

大阪府 Aの保護者、あるいは以前担任をしていた姉のAに対する受け止めがどうだったのか、その変化があるのならどのように変わったのか等、家族の話を知りたい。

報告者 父、母、5年生の姉、3歳の妹がいる。3人兄弟の真ん中。Aが教室を渡り歩き、いたずらしたりする様子を見て、姉は「先生、うちの弟が迷惑かけてごめんね」と涙ぐむような姿もあった。小学校1年生からのAの様子について、父母は学校の対応に問題があるのではないのかかという思いもあったと思う。姉も含めて3年間のこの家庭との付き合いの中で、何となく保護者のAに対しての気づきが変わってきたように思う。Aの頑張りを中心に、電話とか連絡帳とかで連絡をする中で、少しずつAの理解も深まってきているのではないかと感じている。

高知県 Aについての背景をどのように情報収集したのか。また、Aへの関わりについて職員間でどのような共有をして、組織的にどのように取り組みを進めていったのか。

報告者 Aのためだけではないが、校内情報共有する機会を週一回、必ず取っている。そこでの情報を元にそれぞれの先生が関わり、できるところでたしなめたり、時には強く叱ったり、褒めたりをしていた。保育要録などの情報がすごく貴重だった。一歳児からの入園だったが、今と同じような状況があった。前年度の担任からは申し送りの内容を直接

聞いたり、文面で残したりしていた。

鹿児島 報告の中に、クラスの子もたちからのAが成長しているといった言葉があるが、Aの個性をクラスの子たちにどのよう話していたのか。

報告者 日々接していたら、Aに強烈な個性があるので伝えなくても分かったと思う。前からAを知っている子は、怒っている先生を見ると慰めるように、「先生、前はこうやったけど、今こうやってちゃんとやれて、私から見たら成長していると思う」と言ってくれる。どちらかという子どもに教えられている。

大阪市 席に座った、前を向いた、話を聞いている等、やったことを短く言うということで授業中の立ち歩きがなくなったとのことだが、以前にも同様の形で離席することが減った経験があったのか。これ以外にも手立てを講じていたのなら知りたい。

報告者 先生はそれを見ていたというような形で伝えたら、たまたまフィットしたのかと思う。CDを鳴らす、スイッチを入れるなどの小さな係を与えることもある。いたづらをしながら振り返るような姿もあり、「こっち見て」「僕の方を向いて」といったメッセージだと感じていた。

大阪市 高知の教育といえば、教科書無償の運動から始まった教育ということを私たちは学んできた。今どういう形でつながっていった、報告者につながったのか聞きたい。

報告者 20代の頃、長浜小学校で勤務した。そこでお母さん方からたくさん教えていただいた。この学校で勤務できたことは大きかったと振り返る。教科書を配布するときは、必ずその学年に合わせた方法で伝えている。

熊本県 どこに差別があって、それをどう解決されているのかという視点でお話をしてほしい。

高知県 先生方がこういうことができるためには教員の人権感覚が高まっていないと子どもへの働きかけは組織的には難しいと思う。先生方の人権意識を高めるための研修はどのようなことを行っているか教えてほしい。

報告者 Aは部落にルーツがある子どもである。Aの進路保障をしっかりとすることが、人権尊重につながるのではないかと考えている。進路をきちんと保障する。毎日の学校生活が楽しい。勉強がわかる。友達とけんかしても仲直りする術。そして関係を結び直す。そういったことを、折を見て伝えていくことが重要だと思う。市民会館に子どもたちと低学年から訪問に行ったり、そこでお年寄りとの触れ合いをしたり、春野の地域学習を順番に積み上げていくという学習をしている。そういった中で、本校に赴任したら、どの子ども大切に、その背景をしっかりと理解してということはしっかりと研修している。地域の市民会館を訪ねたり、地域の歴史を知ることを中心に。それぞれの学年に合わせた特設教材を作って、みんなで研修している。

滋賀県 承認要求を満たす、他者評価を高めていくことは、最終的に進路保障を考えていったときに、

果たして本当にそれでよいのかという疑問がある。結局、比べられる中にいるから、ひょっとしたらダメ出しされたらどうしようかという不安感を抱えながら生きていかなければならない。教師の方も比べないでいようと思いつつ、つつい比べってしまう学校文化の日常があると思う。比べられる中でしんどいという子が出てきてしまうこともある。最終的には他者評価ではなくて自己評価。自分の現実、自分の所在地がどこにあり、それに向かって踏み出している自分も踏み出せない自分も自分自身がどう評価するかというのが、この社会の中でやっていくに当たっての必要な力かなということを今痛感している。ただ、自己評価する機会を学校はいろんな場面で奪ってしまっている。その補填というところで他者評価を入れたり、自己肯定感を高める、承認欲求満たすというふうにしてしまっているのではないか。自己評価がしっかりできる環境を私たちの当たり前が脅かしてないか、奪っていないかということをごび検証していただきたい。

熊本 自分自身を捉え直し、肯定的に見るような変化があるのではないかと。現段階でAが自分のことをどう評価しているのか教えてほしい。Aも友だちも成長してきている今だから見えてきた今後の課題、仲間づくりの方向性を教えてほしい。

報告者 誕生日を迎えたAは「友達といっぱい遊んで、友達と仲良くしたい。お父さんやお母さんの言うことももう少しちゃんと聞きたい。」と言った。これが私は今、自己評価なのかなと感じた。自分自身を捉え直し、つい手を出す自分、とげのある言葉を出す自分とさよならしたい、もう一つ成長したいという思いを感じた。3年生になると、学習面はAの苦手な部分がどんどん広がっていくことになっていくため、その支援を具体的に考えていく必要がある。また、彼の中の気持ちをコントロールするすべをいろんな場面で伝えていくことが大事なのではないか考えている。

神奈川県 今まで32年間特別支援学校で勤務していた。その中で、人権の授業を10時間程度行う中で子どもたちが自分のことをどんどん話をしていくようになっていった。そこで小学校、中学校の話をし始める。ほとんどの子が何かしらいじめを受けたり、傷ついてきたという話もあった。「自分は障害児学級に入ったときにすごく嫌だと親に言った。人権の授業を受けて、今振り返ってみたら、自分は実は障害者を自分が差別していたということがわかりました」というようなことを言ってくれた子もいた。

Aからでないとならないことが私たちにはたくさんあると思う。私たちが障害を持っている人たちから学ぼうという姿勢をどれだけしっかり持っているか、その視点を見定めていく必要がある。

滋賀県 私は小学校に勤務しているが、就学前の先生が幼少連携ということで小学校の様子を見にこられることがあった。園で大変やった子が頑張っ

ている姿を見て、すごく頑張っているな、うれしいなという思いを持って帰られる様子があるが、小学校の先生はなかなかまだこういうところできていませんとか、ちょっと字を書くときとか、学力的な話をして、小学校の先生からはできなかったことを伝えられると言われた。知らず知らずにその子自身ができたことだけを見ている自分がいることに気付いた。

先ほどのレポートのどこに差別があるかというなら、A に対して偏見なく接してくれていることが大変ありがたいなと先生が思われたところにあるのではないかと。自分を問うことが人権教育の大事なところなのかなと思う。知らず知らずのうちにできない子だとレッテルを貼っていたのは自分じゃないかなということ振り返りたいと思う。

—1 日目の意見交流—

大阪市 どこが同和教育の課題かと感じて考えた。私は以前、明日の報告にある鶴見橋に勤務した経験から同和教育、部落問題をどうしていくのかということが常に頭の中にあった。その中でぶち当たったのが、夜間学級だった。ある生徒が夜間学級に行ってみたくて言うので、夜間学級との交流を始めた。子どもたちは、夜間学級を通して在日の親の思いや苦労した話など聞いて、文化祭で発表するなど、様々なことにつながっていった。その後、別の学年の担任をした時に、保護者から今年も3年生で交流をやってほしいと言われた。その親は、夜間学級があるのは知っていたけど自分はよく知らない、自分の子どもには交流させて正しく理解させてもらいたいと言われたこともあり、自信を持って次の年も交流をしていった。残念ながら夜間学級は統廃合の中でなくなってしまった。人権課題は学校の中にいたら絶対見つかると思う。これを探ることが大事である。子どもの横についていると、わかることはたくさんあって、前に立っていると見えないこともある。色々なことができるようになる。気づきと取組がリンクしたら素晴らしいものではないか。

熊本県 教員になって、程よい距離感というのが何か安心できるような感覚だったが、結局自分が傷つかない、自分を守るための距離のととり方ではなかったのではないかと感じた。自身の家庭環境もあり、幼い頃からなるべくそっと生きているような感じでいた。勉強できると褒められるので、学力は自分を守るためのものだった。学校の先生になっても自分を守ることが優先で、子どもの心になるべく触れたくないという部分があった。それが変わったのは、同和教育推進教員になったことだった。家庭訪問をしたり、解放運動の支部の方たちと話をすることで、だんだん村の人たちが話されることと自分の暮らしてきた体験が重なってきた時に、自分の中に部落問題に対する怒りが出てきた。部落差別をしていた祖母たちの言動についても怒りが湧いてきました。程よい距離感を一度乗り越えて

家庭訪問してみませんか、親と話をしませんかということが、私からの思い。先輩たちから子どもをつなぐことは子どもたちがお互いの暮らしを知り合うこと、お互いがどんな気持ちで学校に来ているかを知り合うことだということだと習った。生活ノートや班ノートの中で子どもたちが自分のことを話してくれるような取組を始めた。私自身も自分の家のことなども含めて、自分のことを話すということをしてきた。子どもたちの暮らしが見えると、こんな話をしていこうと思えるようになる。程よい距離感ではなくて、近づくことでできることがあるのではないのかなと思う。

私の父母は部落差別をしてきたが、祖母の育ちはどうだったのだろう、どんな時代だったのだろうということ学習すると、そのしんどさが見えてきた。差別するように追い込まれていったと見方が変わった。私のことをとてもかわいがってくれたことを改めて大事に思えるようになった。差別はさせられるものだと改めて感じた。

学校が先生たちにとってプレッシャーが大きくて、先生方が子ども指導をできるのが当たり前といった形で、先生方が窮屈になっていのではないかと心配している。そのことができない子どもを迷惑だと感じるような形にさせてしまっているのではないかと。何とか学校でぬくもりを作っていこうと努力されている報告だと思うし、特に自分のできなかったことを報告することは苦しい部分もあったかと思うが、率直に書かれていたおかげで、私たちも学ぶことができた。

熊本県 滋賀県の報告で A の発言の真意を聞いていないとのことだが、今からでも遅くないのではないかと。報告者(滋賀県)と A の関係はきつとまだゴールではない。今後もずっと続いていくはず。機会を見て、真意をぜひ聞いてほしいと思う。そこにその時の先生の思いも伝えられれば、先生と A との関係がいい方向に続いていくのではないかと。A から学んだことを今日の前にいる子どもたちに渡せるとよい。C から聞く話も学級づくりにもそれはプラスになるのではないかと。熊本では綴る、語る、返す、そういった営みを大切にしている。そのことをぜひやっていただきたい。

新潟県 学校が子どもたちにとってどういう場所になっているのか、それこそ居場所として機能していないのではないかと、自分たちがこれでいいのかということを疑問に思わざるを得ないような場所にしてしまっているのではないかと話が出てきた。この春までいたところが全校生徒 9 人しかない分校だった。学力的に厳しい子たちがたくさんいた。入学後のテストの点数がこれくらいだったから高校生活を全うできるのかなと言われていたが、実際はクラスの中で周りとは比べなくていい、自分自身を伸び伸び出せると、こちらが驚くほど成長して無事に卒業していった。高校は特にできないとダメと言ってしまいう傾向があり、できなくてもその教室にいてもいい、仲間とみんなで支えあ

っていれていけばいいと言い切れない部分を私たちは持ってしまっているのではないか。そういった差別性のある学校に浸かっていると、教員がその中で気づかずに差別性をどんだん体の中に溜め込んでしまうかもしれない。職員室では、「あの子できないからね」「あの子こんなこともできないんだよ」というような会話が飛び交っている現状もある。ここをどうすれば変えていけるかというか、まず自分自身に何ができるかというところを改めて考えている。

—1 日目のふりかえり—

協力者から2本の報告の概要、気づきを報告した。また、報告の中にあつた発達段階という呼称について司会者団としての見解を聞きたいとの意見があり、次のように説明した。発達段階という言葉自体は、文科省や様々なところで多用されており、一般的に使われている言葉である。今問題になっているのは、発達段階というものさしで、子どもたちを振り分けたり、決めつけてしまうこと。そのことが子どもたちの未来をあきらめさせてしまう。そこが問題であつて、今後も社会全体の問題として私たちは考え続けていかなければいけない。議論をしていかなければいけない。数値化される成績、評価で比べるものではないと頭ではわかっているけど、発達段階というものさしで見ること、見られることに何の疑問も持たない。それこそがまさに問題である。改めて私たち自身のものさしを問う機会にしていきたい。

—報告3—⑦「なあ先生…」

～毎日の家庭訪問から感じたユウキの変化～

(大阪市人教)

熊本県 ユウキを家まで迎えに行くのが先生だけでなく他の子どもが迎えに行くなどの関りがあつたのか。また、学習が嫌だつたユウキが高校に行きたいと思つたのか。

報告者① 基本的に私が迎えに行っていた。また、他の教員とかも家庭訪問に行つていただいて一緒にサポートしてもらつた。数回程度同じクラスメイトに行つてもらつたこともあつた。「迎えに行つてもいいか」という申し出にお願いすることもあつた。進路に関することについては、1年生の頃には全く志望校を考えてもなかつた。勉強にも前向きな気持ちはなかつたが、77期生の生徒たちが3年生に入つてから進路について考え、受験勉強に取り組む姿を見て、ユウキも高校について考えようかなという考えを持つようになった。

熊本県 家族構成について教えてほしい。父親がユウキについて関わるようになった変わり目は何か。

報告者① 父、母、年の離れた兄がいる。父母ともに学校には協力的だつた。学校へ関わる窓口になるのは父が多かつた。父親がユウキに強く当たつてしまつた時、その時の家庭訪問では、父親が同じ中学校の卒業生であること、当時の自分と比べたと

きに頑張つてほしい、成長してほしいという強い気持ちがあつたなどの話を聞いた。その時、自分自身の悩みについて話ができた。ユウキへの悩みや困り感などを話せるきっかけのひとつが家庭訪問だつた。正直、家庭訪問は苦手だつたが、教員と保護者に繋がる一つのきっかけ作りの場所かなと思うようになった。家庭訪問を重ねるにつれて父親の気持ちが変わつていった。また、ユウキが行きたい高校であれば全力で応援したいという思いを両親が持っていることも家庭訪問で確認できた。

滋賀県 ユウキがアトピー性皮膚炎や足が不自由なことであつて学校に行きたくないという思いがあつた。ユウキの体のことで引け目を感じさせてしまつているものが学級にあつたのではないか。また、車いすを利用するユウキに対して、何か手伝つてあげないといけないというクラスメイトの思いはどんな立ち位置だつたのか。できる範囲で頑張つていこうというのは誰が決めたものなのか。

報告者① 「ユウキが困っている時は助けてくれ」という話をする必要がなかつた。理由は、クラスメイトはユウキを特別扱いにすることなく接してつた。「できる範囲」を決めたのは、家庭訪問の時にユウキと父親と私が話し合つてきめたこと。最終的に決定するのはユウキであり、ユウキの思いを聞いて決めたことである。

報告者② この学年は、ユウキだけではなく、様々な困り感を抱えている子どもがたくさんいる。子どもが他の子との関りについて相談してくる。「このようなきにどうすればよいか」「こんなこと言つたら傷つくかもしれない」など。私たち教員は、子どもと一緒に悩んだり、考えたりしている。ユウキに対しても周りの子どもたちから「どうしたらユウキが学校に来やすくなるか」など相談はあつた。正解が何かわからないけれど、お互い話しをして相談しようか、一緒に考えてみようかということをお大切にしている学年である。

大阪市 行きたい高校を決めた理由を知りたい。

報告者① いくつかの高校に見学に行く中で高校では部活動をやつてみたいという思いを持つた。説明会で様々なサポートがあることを知つたこと、自転車を通える範囲であることを理由に行きたい高校を決めた。

三重県 車いすを使いたがらないという思いはどこから来ているのか。通うのが嫌だ、面白くないというユウキの不登校の理由は本当にそうなのか。学校に来るといふことをどう捉えているのか。

報告者② 入学当初からあまり使わなかつた。手術を終え、歩行ができる状態であつたため、車いすを使わない方がスムーズに歩行ができるが、車いすがない状態だと不安な部分もあるため、教室にいつでも使える状態でおつた。

報告者① 不登校の理由は、いろんな原因があつた。勉強だけでなく身体のこと、父とのことなど様々なことが重なつてつた。本人の行きたい思いもあつたこと、暖かい雰囲気の間人たちと実際に

あって話してほしいという思いもあり、少しでも学校へ来てほしいと思っていた。仲間との関わる時間を作ることを意識していた。

熊本県 家に帰りたと言ったユウキに対してユキコが言ったことでユウキの心の変化はあったのか。報告者が学級づくりで大切にしていることは。

報告者① ユキコが経験したことも含めて話をしてくれたことがユウキにとって大きな転機となった。ユキコに言われた後に、ユウキが私に「自分を変えなければあかん」と話をしてくれたことを覚えている。私が大切にしている言葉は「個性を大切にすること」。77期生は外国にルーツのある子や様々な困難を抱えている子どもがたくさんいる。子どもたち同士がいろいろなものも含めて大切にしながらつながりあっている。そんな集団とユウキが繋がってほしいという思いでユウキと関わっていった。**滋賀県** 登校の理由を子どもの背景とか環境とかたどっていくなど、子ども自身に課題があるかどうかを問う前に、その子が来れない学校がここにあるのではないかと真っ先に問うべきではないか。そういった議論を鶴見橋中学校で行ったのかどうか。また、参加者の学校では不登校を「安心できる学校であったか」という視点で議論されているかを聞きたい。また、足が不自由であることに対する自己理解はどうだったのか。ユウキ自身に障害者差別はなかったかどうか。

私が勤務していた高校では、中学校からの引継ぎで「本人があるいは保護者の方が義務教育終了段階で自分自身の障害特性をどのように認識していたか」「その子が社会に出た時にどんな大人に育ててほしいか。その子に関わってきた先生方の思いを伝えてほしい」とお願いしている。高校生活で困らないようなヒントではなく、社会に出ていく時に困らない力は何かを中学校から引き継ぎ、その力を高校3年間でつけていく必要があるから。特別支援教育の充実だけを最終目標にするのではなく、その子が差別のある社会で生き抜くために必要な力を身につけることが進路・学力保障ではないか。

—報告4—⑤ 僕は生きていくのが不安だ
～高校卒業 5年後のインタビューから～
(熊本県人教)

—主な質疑と意見—

滋賀県 この報告レポートの最後に「私自身がどうすればケイさんに気を遣わずに主張できるのかを問うべきだった。」とあるがなぜこの時に聞えなかったのか。どのようにこの時、ケイさんのことを捉えていたのか。

報告者 彼に問題があると思っていた。彼に甘えがある、もっとがんばれ、という思いだった。高校を卒業して5年後のインタビューをきっかけに、その後もちよくちよくと彼に会う。会うたびに、自分がダメだと思う。私は耳が聞こえる。彼が高校在学当時、身の回りがある、社会にある差別が私には見えていなかった。見ようとしていなかった。今、ケイさ

んはコンビニで仕事をしている。彼の兄や姉は結婚した。自分も結婚したい。たまに友人がコンビニに来る。友人は赤ちゃんを抱っこしていた。そんな話もしてくれる。難聴という障がいがあり、彼はよく「すみません、すみません。」と言う。彼の責任ではないのに。これからも彼の隣にいたい、関わっていきたいと思う。

大阪府 難聴の生徒が支援学校から転入してきた。聞こえにくさの学習を学級で行った。授業の最後にその生徒が伝えたメッセージは「みんなともっと遊びたい。」だった。手話をもっと覚えてほしいといったことを周りの人たちは想像していたから、はっとさせられた。ケイは夢を語っているとのことだが、ケイの今の願いを知りたい。

報告者 中学校の時に仲良くしていた子が東京にいたため、東京へ行きたいという思いを持っていた。今は接客業をしたいと言っている。おしゃべりが好き、人と関わりたいという思いを持っている。**新潟県** 報告者自身の気づきや、その時の立ち位置のこと、今思うことなどを話してもらい良かった。報告者の話を聞き、私自身もこのレポートを通して『お前はどうかだ?』と、私に突きつけられている思いである。ケイさんにとって、なかまはいたのか。

報告者 クラスで話したり、関わりのある友人はいた。ただレポートにもあるように周りは知っていることも、自分(ケイさん)だけ知らなかったことがあったり、大人と話した方が楽だった、ということも言っていた。

長野県 難聴者であるケイさんは、高校在学中に「僕は生きていくのが不安だ。」とつぶやいた。きっと今も、生きていくことへの不安の中で生きている。自分の存在感ですら薄れてしまいそうな時もあるかもしれない。この不安に対して、どのように向き合おうと思っているのか。

報告者 ケイさんが感じていた(今も感じている)生きづらさや、彼がよく言葉にしていた(今もしている)「すみません、すみません。」という言葉はどこから来るものなのか、考えるようになった。当時は、指導の対象としてケイさんを見ている自分がいた。どこか、自分は教師だから、と構えてしまっていて、彼の暮らしや、身の回りにある差別に気づいていなかった。見ようとしていなかった。これからも関わっていきたい

長野県 その子の不安を解決する、これという方法はないかもしれない。でも、本当にその子が困った時、本当に不安になった時、その子の頭にパッと浮かぶ人がいる。私はそんな関わりを大切にしていきたい。

熊本県 高校時代は自分から発言して変えたいという思いから生徒会長になりたかったと言っている。何をどう変えたかったと思っていたのか。

報告者 耳の聞こえない人だという認識が周りの人にあると感じていた。そうではなく、自分の名前でも発言することで一人の人間として見てもらいた

いという思いがあった。

熊本県 課題を持たされた子ども達がいる。このケイさんとの出会い、今の関わりがあって、今はどう変わってきたのか。

報告者 ケイさんとの出会い、そして今も時折彼に会って話す中で、彼に色々聞くことばかりで、自分のことは何も話していなかったことに気づいた。私は、自分を語ることは苦手で、なかなかできなかったことだが、障害への考え方が変わってきたことなど、自分のことを彼にも話すようになってきた。ケイさんは、「先生にもそんなことがあったのですね」と言い、このレポートを彼に読んでもらった後、反応を聞くと、「このレポート、自分の説明をする時に使います。」と言ってきていた。これからも関わっていききたい。そして、今勤務する高校(定時制)では、「生活体験作文」というものに取り組んでいる。元々この学校で行われている取り組みだが、幅広い年齢層の人々が集まる教室で、10代もいれば、50代もいる中で生活体験作文をかいてもらう。私も書くようになった。自分と向き合う時間をつくり、そして発表もしてもらっている。嫌がっていた50代の生徒の方も、発表してくれた。

熊本県 20年前に担任した難聴の生徒のことを思い出した。登校は2日しかなかった。補聴器を持っているが、周りの子に知られたくないからつけない、周りへの話もしてほしくないと話す。家庭訪問で補聴器をつけさせてもらい、これだけ雑音を拾うのかと驚かされた。知らなかった。結局、退学し就職していった。ケイさんの家族はどんな支えをしていたのか。

報告者 今、両親と同居している。家族で難聴はケイだけ。母は手話ができるが、父はできない。どういふサポートがあったのか具体的には把握していないが、難聴学級の設置を訴えるなどの動きを作られていたので何かしらのサポートはあったのだと思う。

熊本県 報告者と同じ学校に現在勤務している。学校で、職員室で過ごす中で、教師の気になる声が聞こえてくる。上から目線で、子ども達のせいにする雰囲気。高校生はこうあるべきだ、という教師の声、眼差しが気になる。報告者とは「そこじゃないよね、子どもの暮らしが出发点よね。」と話をする。
熊本県 この4月から開校した夜間中学校に勤務している。10代から80代の生徒が在籍しており、中には外国籍の人もおり、毎日が人権教育そのものだと感じている。自分自身、人権教育と聞くと水俣病やハンセン病のことというイメージがあった。今回の大会でレポート報告、討議の中で多くのことを学べた。明日からの生活に生かしていきたい。

神奈川県 この難聴という障害のあるケイさんのことを思い、インクルーシブって何だろう、と考える。目指すところは共生というもの。ケイさんは、小学校では難聴学級があり、同学年の子ども達とは分けられ、たった一人で生活を送る。中学校、高校での生活は報告の中にあっただような感じ。でもケイさ

んは、やっぱり皆と話をしたかった。この社会にはやはり差別というものがあり、冷たく感じる時もある。差別が存在する社会の中で、差別に気づき、負けない力を身につける。この報告からは私たちの課題を突きつけられている、そんな気がする。

報告者 差別に気付くこと、気付いた上で反差別の集団を作ることをしていきたい。例えば、友だちが就職差別にあったときに一緒に怒れる人でいてほしい。今、目の前にいる生徒たちにも差別はおかしいとまずは自分が怒らないといけない。違反質問を受けたときに「学校の指導によりお答えできません」と答えてきた子たちを絶対守るという気持ちでいる。

Ⅲ 総括討論

討議の柱を確認し、討議を進めた。

- ① 自分の立ち位置を確認する
- ② 差別の現実と子どもとの関わりについて
- ③ 深いところでつながる
- ④ インクルーシブ教育

滋賀県 報告者(滋賀県)同じ学校で勤務をしている。教務主任、生徒指導の立場で A と関わっていた。理想の最高学年像を追い求めていく中で、報告者と A との距離ができていったと思う。その姿を見ていて学校としてどうしたらいいかと思いつながら、自分自身の7年前に担任したクラスを思い出した。その時すごく苦しかった。自話しかけると暴言で返ってくる。話しても一方通行になり、向き合っていない自分の姿と重なるところがあった。チームで見る、学校全体で見えていく、一人で背負わなくてもいいと報告者に話していた。学校の中で誰か関係を築けている人がいたら、そこが A さんの居場所になったりするのではないかと思っていた。今考えるとそれでよかったかとも思う。A が「ほんまに帰るしな！」と言った時に僕が追いかけたが、僕がクラスを見ることもできた。でもそれがその時にはできなかった。その時は報告者を助けたいという考えで動いていたが、A のことをしっかり見られていなかった。私も A が大変な子だから担任するのも大変だという偏見を持ったような言い方をしていたと振り返っている。私自身、7年前にうまくやれていなかったことを通して、自分が変わらないといけないなということの思い、今がある。このレポートを通して、そこに気づけたことがとてもよかったと思う。

報告者(滋賀県) 自分の中に差別心があることにすごく気づけた。それはとても大事なことだし、それをいかに子どもたちに伝えていくかが大切。保護者にもそれを伝える必要があると思っている。保護者に連絡したときによく聞く言葉が「あそこはああいう子だから関わらんとときと言っているんです」ということ。それが差別だということはこの二日間思った。いくら子どもたちに伝えても、おうちの方がその気持ちを持っておられたら、なかなか難しい部分もある。

長野県 30年前に中学校で3年間担任した子が結婚差別にあった。相手には、自分の出身は伝えているということなので、結婚式を楽しみにしていた。ところが準備も全て整えた段階で、彼女の親に自分の結婚相手が部落出身だということを伝えた途端に、態度が変わった。反対をしている両親に会いに行き、夜通し両親と話し合ったが、聞き入れてもらえなかった。全然通用しなかった。結婚は破談になっていく。同和教育を実践している先生から教え子を連れてある人に会わせたいと言われたので、結婚差別から立ち直れないでいる教え子と会いに行った。私のこれまでの実践や、その子との関わり等を話した後、その先生が私に向かってこう言った。「この青年が、こんなふうには部落差別に対して負けてしまうような人間になったのは、中学校で3年間担任したらお前のせいだ。」その時以来、私が子どもと関わる時に目指したのは、部落の子がその子にとって自分の大切な部落を自分で掴み取っていくということ。自分が見つけた自分にとっての大切な部落を拠り所として生きていくこと。それをどうすれば実現できるかということだけを考えて実践をしていった。部落の子が自分が部落で生まれたことをマイナスだと思ったら、部落を差別する人間に勝てるわけがない。それを思い知った。もう一つ言われたことは、「部落の子と出会えたら、その子との出会いは一生続けている」だった。これ以上自分を作り変えなければ、それ以上前に進めないという正念場を、私は教え子の結婚差別の時に学んだと思っている。自分を作り変えなければこれ以上先には進めないという場面が誠実に子どもと向き合えば必ずあると思う。そういう子どもとの関わり、出会いを大事にしてほしい。どこにいてもその子の横にいる。そういう関係を作っていければいいなというふうに思っている。

大阪市 今、大阪では非常に厳しい教育環境がある。一つは、学校選択制。どんな重度の障害を持っている子どもでも地域で自立できるように、親が死んでも地域で共に支えられていけるような町をつくってきたが、選択制により、表には出ない差別意識が新たに合法的な形で進んでいる実態がある。子どもが減っているため、教員数を確保するのも非常に苦労している。もう一つは、大阪が独自にやっているチャレンジテスト。これによって学校をランク化し、成績もそのチャレンジテストによって規定される。そういうやり方が今の社会でどんどん進行している。それが大阪の教育を守りたいと思っている者にとっては、足かせ、手かせとなって子どもたちをどんどん切っていく現実もある。

熊本県 高知県の報告の中で、周りの子たちが偏見なく接してくれるという話があった。これはひっくり返せば、先生が偏見なく、関わっていたからだと思う。子どもたちにいいところを伝えるだけでなく、普段の言葉がけといったところも考えないといけないと感じた。

三重県 特別支援学級の担任をする中で障害者差

別に出会ったことがある。その子(以降 A とする)は心疾患があり、乗り物に頼ってでないと行動できない。その A に対する差別。保護者から「5年生になってなぜそんなことが起こるのか。学校はどうなっているのか。」という話があった。学校として仲間づくりができなかった、A のことを周りの子が知れていなかったと思い、A の心臓のことを知ってもらう授業をしたことがあった。A のことを知ってもらったことで、優しくしてくれる周りがいた。周りから見たらすごく優しく感じるが、それは表面上だけの良さだった。原学級の先生とも一緒に考えて、みんなの気持ち、思いを綴ってみんなでしゃべっていかねばならないという話をしていたが、結局うやむやになって5年生が終わりになってしまった。5年生の時に支援学校に転校したいという話が出た。その根っこには学校が嫌だという思いがあったはず。6年生になり、原学級の先生は最高学年だからこうしなければならないという思いで指導される。A はそれができず、できない姿を周りが見つけ、周りから下に見られる姿もあった。クラス全体で話をしたいと担任の先生ともかけあったが、みんなと話をしたら差別が広がると聞き入れてもらえなかった。仲間づくりがなかなか難しかったと感じている。A は卒業していったが、進路は支援学校を選んだ。A が自己実現するためにどうすればよいのか。A がしたいこと、やりたいことができる社会にしていけないといけな。なかなかそれが難しい世の中だということは分かっている。でも、そんな世の中を目指していきたいと思う。

滋賀県 かつて進路保障の分科会でこんなことを言われた方がいた。「先生が昨日から部落部落と気安く言い、進路保障って気安くしゃべっている。その中で気安く言っている部落で自分はずっと生きてきた。先生はいろいろかっこよく言ってくれるけど、うちの村からしたら進路保障とはたったひとつや。死ぬな。」僕らが保障するべきものは生きること。生きるというのも我慢し、耐え、うつむきながら生きるのではなく、それぞれがそれぞれらしく生きるということ。進路保障は同和教育の総和ではなくて、教育の総和である。教育に携わる以上は、関わっている一人ひとりの未来、生きるということを保険しなくてはいけない。保障されるような社会の担い手をしっかり育てていく。もう一つ、そこから学んだことは、差別の当事者が声を上げなかったら、僕は考えられない行動ができないのかということ。どこかで被差別の当事者の問題としてしまっている自分がある。それを超えていくのが自分の務めだと思う。同和教育、人権教育に関わってきたら、しんどい子どもたちとも出会うと思うが、どこかで課題がある子、しんどい子というのを課題のある子、しんどい子のせいにしていないだろうか。被差別の当事者が声を上げなければ襟を正せないような自分は何なんだろう、それぞれがこんなしんどい社会で生きるのが嫌だと自分自身が自分の中に差別を見出さなければ前に進まないのではない

か。どこに差別があるかという話があったが、私の中になかったら、あるいは私の中にあると思って探そうと問おうとしなかったら、遠い世界の話になる。現に來れない子がいる学校に毎日出勤している私は何なのかということをも自分自身が考える。何か教える、育てる、支える、一方的な立場に自分自身をかこつけていないかということをも改めて学んだ。

大阪市 熊本県の報告からいろいろな気づきがあった。そこから色々な矛盾もわかってくる。他のいろいろなことを学んで想像を広げることが大事ではないか。現場に帰って、同じ悩み、課題をどんどん見つけていけば、色々なことができるのではないか。

—報告者感想—

滋賀 私以外の3名の報告者の全国での取組を知り得たことが大きな学びである。自分を問い直す大切さに改めて気づくことができた。このレポートを書いていく上で自分にも差別心があったということにも気づけた。それを素直に認めて、改善していこうという位置に立てた実感がある。自分を守ってしまうような人間の弱さにも気付けた。自分の未熟さにも気付けたので、この学びを目の前にいる子どもたちにまずしっかりと伝えながら、ともに差別のない社会をどうつくっていかをこれからも考え続けていきたい。

高知県 いろんな視点で質問やご意見をもらったことでより深い学びになった。本校には部落にルーツのある生徒がいる。顕現化はしていない。本校の部落差別について向き合っていない自分に気づくことができた。Aの学校生活の姿に生きづらさを見取りながらも、その暮らしを十分見つめることができていなかった。Aは最近子ども会に参加し始めた。まずは、子ども会に足を運ぶことから頑張っていきたいと思う。発達段階という言葉について、この度初めて学ぶことができた。背景を知らずに使っていた。これは私にとってとても貴重な学びであった。

大阪市① 二日間通して家庭訪問はそもそも何のためにあるのかということについて考えていた。その子とつながり、その子との関係を絶やさなためなのかと感じている。不登校の生徒が実際にいる学校に勤務している自分自身がどう思っているのか振り返ったときに、やっぱりこの問題に関しては教員生活だけではなく、生涯を通して考えていくべき、向き合っていくべき課題だと感じている。明日から大阪に戻り、子どもたちと向き合っていくが、自分の考え、生き方を振り返りながら、過ごしていきたいと感じている。

大阪市② 生徒との関わりの中で自分自身が当たり前のようにやってきたことが、それは当たり前でなく、すごいことをしていると言っていた。そこは自信を持って続けていきたいと思う。そこに満足せずに見直していき、自問自答して、何がいい

のか、生徒にとって何ができるかを考えていきたい。不登校生徒の対応については、いろいろなアプローチを鶴見橋中学校でやっている。全てがうまくいっているわけではない。今回はうまくいった部分もあるが、まだまだユウキのことを知りきれているかということ、そうでない部分があると気づかされた。まだまだ自分の考えが甘いところもあるため、もっと考えていきたい。

熊本県 学校の在り方を問うしかない、今日の話も聞いていて思った。その一つがやっぱり能力主義社会だと思う。順位をつけたり、偏差値がどうだとか、そこに絡めとられていると思う。通級や特別支援学級に入って馬鹿にされたり、順位などを見ると、それだけで沈んでしまう事実もある。私たちの当たり前やその学校の環境を問わないと奥が見えないのではないかと改めて感じた。

—まとめ—

協力者 分けられて下を向かされてしまっている子どもがいる。そうさせてしまっているのは学校ではないか、その中にいる私ではないかと改めて考えさせられる報告であった。子どもの横に立ち、思いを受け入れていくことで、その子の深いところにあるしんどいことを話していくのではないか。インクルーシブな社会をつくるのは私たちではないだろうか。程よい距離じゃなく、深いところをつながら合える関係をつくる必要がある。子どもたちがお互いにしんどいことを出し合って、その子の暮らしを丸ごと受け入れていく仲間をつくること、差別のある社会の中で差別と闘おうという仲間をつくること、そういったところが大切なのではないか。誰もが自分らしく生きていく社会をつくるために、学校の役割はとても重要だなということをも改めて思った。たくさんの言葉を、思いを受け、私の中にある差別心を読み直して、向き合って、闘いながら、目の前にいる子どもと接していきたいと思っています。もう一度自分の立ち位置を読み直しながら、子どもの確かな未来に向けて、私たちにできることをやっていきたい。